



## 和ろうそく・飛驒古川

白壁土蔵と黒腰壁が見事な調和を見せる街並みを歩いていると、その脇を流れる瀬戸川にはニシキゴイが泳ぎ、心なごむ光景を醸し出す。

飛驒古川（飛驒市）は約四百年前、高山城主の金森長近ながちかの養子、金森可重ありしげが築いた城下町と伝えられる。高山と同様に商工業を中心に発展した。飛驒の匠の技を生かした高山と似た街並みだけに、目にまぶしく映る。写真は、和ろうそくを作り続けて四十年、三嶋和蠟燭店の七代目を継ぐ三嶋順二さん（六十七歳）を取材させてもらった。天明年間より約二三十年間、黙々と和ろうそくを作り続けて今日に至る。午前四時から午後六時までの長丁場である。匠を支える心構えを問うと「手作り和ろうそくの制作で一番重要なのは、長時間の作業だから精神力と体力を保つ集中力を養い、それを持続させ、平常心を心掛けることです」と、淡々と語る。匠の技はまさに職人芸であり、名人芸にふさわしい手さばきを披露してくれた。八代目の大介さん（二十四歳）は今、休業中である。

（写真・文 樋口健二）